

## バイス

大阪に来てから、なかなか映画館に行くことができない。名古屋のときは、自宅から近い「三越洋画劇場」などをよく利用した。目の手術のあとは、映画館から遠ざかっていた。

久しぶりに大阪梅田の劇場でアダム・マッケイ監督による「バイス」を鑑賞した。高層階にある大きな劇場は、映画館というより、なんだか「イベント会場」のようで、たくさんのスクリーンがあったが、この映画は空いていた。一番前に座って、首が痛くなったが、2時間余り集中して鑑賞した。写真の「YAHOO! 映画」のレポートを抜粋して紹介しよう。



まず、タイトルが巧い。「vice」は、「vice president (副大統領)」のように役職の前に付く場合は「副;代理」を意味するが、単独の名詞としては「悪徳;悪玉;欠陥」といったネガティブな意味。本作の主人公、ディック・チェイニーに備わる複数の属性を一語で表している。

酒癖の悪いろくでなしの若者が、のちに妻となる恋人リンから叱責され一発発起、インターンとして政治の世界へ。型破りな共和党議員ラムズフェルドから権力を操る術を学び、妻との二人三脚で出世の階段を登り始める。石油関連企業ハリバートンのCEOを経て、ついにジョージ・W・ブッシュ政権で副大統領に就任。危機にチャンスを見出す才覚と、無理筋な案を相手に納得させる異能により、影響力を着々と強化していったチェイニーを、クリスチャン・ベールが20キロもの増量と特殊メイク、圧巻の演技力で体現した。ラムズフェルド役のスティーブ・カレル、ブッシュ役のサム・ロックウェル、パウエル国務長官役のタイラー・ペリーなど、他の米首脳に扮する面々も思わず吹き出すほどの再現度だ。…… 本作は、ブッシュを影で操りイラク権益で私腹を肥やしたチェイニーを、憎むべき絶対悪として糾弾する映画ではない。むしろベールの熱演とマッケイの自在な演出により、複雑で繊細で好感さえ覚えてしまうキャラクターになっているのが皮肉でもある。稀代の悪徳政治家を喜劇の手法で相対化する試みは、物事の見方が一面的になりがちな現代への問題提起であり、怒りや憎しみではなく知性とユーモアで真っ当な世界を取り戻す戦いなのだ。

とかくトランプ大統領ばかり注目されるが、あの2001年「9・11」からイラク戦争に突入する時代のアメリカ政治、とりわけチェイニー副大統領の人物像がじつに興味深い。ホワイトハウスをはじめ、アメリカ政治の舞台を知るうえでも参考になった。こうした映画により、日本の「安倍政治」の舞台裏を覗いてみたいものだ。

(2019年4月23日)